

Pre-News Letter 号外

18年 10月24日 (火) 発信

# Sato Project

## Sato Project

農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—  
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島) e-mail:[mihosma@chikyu.ac.jp](mailto:mihosma@chikyu.ac.jp)

〒603-8047 北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



世界最小のメガネザル。タルシウス。

<http://www.premium-philippines.com/cebu/infobohol.html>

**フィリピンでの共同調査において**

**石川 隆二 (弘前大学)**

## フィリピンでの共同調査に向けて

石川隆二(弘前大学)

フィリピンは 7000 以上の島々で構成される。固有種も多く、それらの絶滅も危惧されるため保全のための多様性調査も急務である。

イネについては、栽培種としては熱帯日本型系統がみられる。栽培形態では冷涼な気候に対応した棚田から、熱帯地方に対応した 3 期作など多様である。

さらに在来種から近代品種に移行する最中に発生する雑草イネが問題化しつつあるようだ。野生種となると東南アジアに一般的にみられる一年生の野生イネはみられない。多年性のルフィポゴン種についてはミンダナオ島の 1 集団についてのみ報告されている。かつて陸続きであったこれらの島々から淘汰されたのであろうか。他種では、大陸ではグラニューラタ種として知られている GG ゲノムが、フィリピンの島々ではメイリアーナ種と分類される。

識別は籾のサイズ変異が特徴である。同種とも同じ GG ゲノムを有し、森林地帯の日陰の湿り気のある砂礫土壌を好むようだ。細胞質ゲノムでは一部に変異がみられることから、これらから同種が識別されるのか、核内の多型マーカーを使用した交雑可能性を明らかにすることで同種とされるのだろうか。このような事象もこれからの課題である。

オフィシナリス、マイニュータを含めて現在でも収集可能であることから、過去の種子で収集された登録品種と live コレクションとして今後収集登録される遺伝資源の多様性比較を行うことが可能である。ただ、遺伝資源はフィリピンにとっても貴重な財産であることから、商業利用に関しては benefit sharin を考慮した厳しい申請が求められる。

ただ、基礎研究の自粛も懸念されることから新たな法律が整備されているという。これは国内の研究機関向けのものであり、国内機関への申請とともに、現地共同体(村など)に事前通告して理解を得ることなどを通して研究対象を確保できるようにしている。

総合地球環境学研究所などが調査に入る場合は、フィリピン大学などの研究者との共同研究という形で共同調査が可能である。ただ、この場合においても DNA なども含めた材料の持ち出しは禁止である。その



ため、協定書の作成においては、この点に考慮した対応が求められる。現在、フィリピン大学ロスバノス校（UPLB）のテレッサ・ボロメオ教授、サンチョ・ボン助手との話し合いにより、協定書の調印をすすめるべく準備を始めている。早ければ2月からの調査を行うことになる。



---

UPLB との協定の長所は、隣接するフィリピンイネ研究所（PhilRice）ならびに国際イネ研究所（IRRI）の施設や人脈を最大限に生かすことのできることである。DNA 抽出なども Japan-IRRI プロジェクトで現地入りしている日本人スタッフとの共同研究を通して実現可能である。もちろん IRRI の遺伝資源センター（GRC）との協定も視野に入れることが必要である。

今回の話し合いを行って始めてわかったことがある。それはこの間、タイにおけるよき共同研究者として尽力されてきたソクラン氏が UPLB 校に留学していたときからの友人がテレッサ・ボロメオ教授であったということだ。それだけでなく、つくば市の生物資源研究所において遺伝資源を担当しているダンカンボーン氏が IRRI にいたときからの親友でもあったという。

---

この間の海外調査において、人の知り合いの知り合いが自分の知り合いであったということがたびたびあった、カンボジアの調査に動向することを前述のソクラン氏から勧められたタイイネ局の遺伝資源担当となるソムソン氏が神戸大学の石井氏（東北大・佐藤雅志先生のコアメンバー）が IRRI にいたときの寮の同僚であったということもその1つである。“オリザの環”という言葉があったが、このような人のつながりは“イネの環”ともいえるのではないだろうか。やがて、このイネの共同研究が拡がりを見せることで、ますます大きなアジア全体を見通せる研究組織になることを期待している。弘前

（写真：大学農学生命科学部にて講演中のテレッサ・ボロメオ教授(女性) とサンチョ・ボン助手)